中瀬古和小伝と音楽作品

A Biographical Sketch and Works of Kazu NAKASEKO

Haruka Tsutsui
筒井はる香

要　旨

本論では、1950 年代から 70 年代にかけて活躍した作曲家で、同志社女子大学学芸学部音楽学科の創設に深い関わりのある中瀬古和（1908-1973）の生涯と創作活動を辿る。これまでに発行されたいくつかの記事から中瀬古和の略伝や教育活動を伺い知ることができるが、音楽活動に関しては十分に語られてきたわけではない。とりわけ創作活動については、作品の全貌が明らかになっていないことから、作曲家としての評価や、戦中・戦後日本の音楽史における位置づけが正当になされているとは言い難い。そこで本論では、中瀬古和の生涯に関わる文献資料を調査し、1）修業時代、2）演奏活動、3）創作活動、4）作品の初演の 4 点に焦点をあてて論じた。

修業時代については、同志社女学校時代、アメリカ留学を経てベルリンでパウル・ヒンデミット Paul Hindemidth（1895-1963）に師事した時期までに受けた音楽教育について述べた。演奏活動については、ドイツ帰国後の 1930 年代から 50 年代にかけてチェンバロ、パイプオルガン、ピアノの奏者として活動していたことを確認することができた。1950 年代以降、演奏活動はほとんど見られなくなり、それに代わって自作品を定期的に発表するようになった。創作活動については、未完やスケッチ、消失曲を含め 65 作品あり、このうち 20 作品が京都を中心に初演されたことが確認された。なお現存する 47 作品をジャンルごとに分類したところ、聖書を題材とした日本語による宗教的声楽作品が創作活動のなかで大きなウエイトを占めていたことが明らかになった。このことは戦争体験の他、中瀬古和自身がキリスト者であったことが少なからず影響していたと言えるだろう。また、日本語による宗教的声楽作品を創作することこそが彼女の作曲家としてのアイデンティティであったと推察される。

はじめに

本論では、1950年代から70年代にかけて活躍した作曲家で、同志社女子大学学芸学部音楽学科の創設に深い関わりのある中瀬古和（1908-73）の生涯と創作活動を辿る。中瀬古和の略伝については、鴛淵卲子女史作成の年表や有賀のゆり女史らによる記事を通して知ることができる[1]。それらによれば、中瀬古は5年間のアメリカ留学の後、1932年から33年にかけてベルリン国立音楽院にてパウル・ヒンデミットのもとで作曲を学んだ。帰国後は、同志社女子専門学校の嘱託講師、講師を経て、同志社女子大学の教授として教育活動に従事する傍ら、作曲活動を行った。没後には同大学音楽学科や《頌啓会》[2]が中心となり、生誕や没後の記念となる年に追悼演奏会が開かれたり、同会の会報誌「音楽学会《頌啓会》だより」にて特集が組まれてきた[3]。このように同志社女子大学内においては中瀬古和の功績がこれまで様々な形で語り継がれてきた。

その一方で、創作活動については作品の全貌が明らかになっていないことから、作曲家としての評価や、戦中・戦後日本の音楽史における位置づけが正当になされているとは言い難い。日本戦後音楽史研究会編『日本戦後音楽史』においては、1957年に日本音楽コンクール作曲部門入選者で関西在住の作曲家たちによって発足された「新作曲家集団」のメンバーの一人として名前が挙がっているのみである[4]。留学時代を含めてどのような音楽教育を受けたのか、帰国後、作曲家としてどのような活動をしていたのか、作曲以外の音楽活動をしていたのかなど明らかになっていない点も少なくない。筆者が調査を始めた2017年、同大学史料センターで中瀬古和の遺品が入った箱が3箱見つかった。そこには、51作品の手稿譜（スケッチや未完成の作品4曲を含む）、講義用の楽譜資料、学期末試験問題、日記、留学時のノートブックの他、葬儀に関する資料などが未整理のまま入っていた。本稿ではこれらの資料を手がかりとしつつ、中瀬古の生涯に関わる文献資料を調査し、主に1）修業時代、2）演奏者としての活動、3）作曲家としての活動、4）作品の初演の4点に焦点をあてて論じたい。

1. 修業時代（1921-33）

1-1　同志社女学校

1908（明治41）年11月18日、中瀬古和は父六郎と母絹子の次女として同志社教

師館で生まれた。今出川幼稚園（現在の同志社幼稚園）、滋野尋常小学校を経て、1921（大正 10）年、同志社女学校普通学部に入学した。同志社女学校普通学部の大正 14 年規則によれば、5 年間の修業年限において、修身、国語・漢文、英語、地理、歴史、数学、理科、家事、裁縫、図画、唱歌、体操・遊戯の学科科目の他「随意科」として音楽が設けられ、ピアノ、オルガン、ヴァイオリン 3 種類の楽器演奏を学ぶことができた[5]。中瀬古はピアノを選択し、アメリカン・ボードとして派遣された F. クラップ女史 Frances Benton Clapp（1887-1977）のもとでレッスンを受けていた。また自身の回想によれば、「音楽書が沢山出版されていたわけでもなく、また子供が本屋あさりをするという時代でもなかった」ため毎週金曜日に「課外音楽」の生徒全員に対して行われていた F. クラップ女史による音楽史の講義を楽しみにしていた[6]。この証言を裏付けるかのように、遺品には、1921（大正 10）年 4 月から 1922（大正 11）年 12 月まで、すなわち中瀬古が女学校 1 年生の時に使っていた“Music lecture”のノートが残されている。そこには J. S. バッハから 20 世紀のアメリカ音楽に至るまでの作曲家とその作品について記されている。

なお、この頃の出来事として特筆しておきたいのは、1921（大正 10）年 11 月 27 日に一歳上の姉、英と共に同志社教会で受洗したことである[7]。姉妹共に受洗したことは、両親ともにキリスト者で、特に父六郎は同志社英学校時代に新島襄から直接洗礼を受けた信仰の深い人物であったことが影響していたであろう[8]。

1-2　渡米

女学校を卒業後、音楽を専門的に学ぶため中瀬古は単身で渡米した。当時の日記によると、1926（大正 15）年 4 月 28 日午前 9 時 50 分に京都を出発、翌 29 日午後 3 時に「横濱丸」で横浜港を出航した。船中にはピアノがあり、夜には演芸会が開かれることもあった。5 月 13 日午前 10 時頃にバンクーバー島がかすかに見え、午後、中瀬古は船長の望遠鏡で海岸の滝をみた。午後 9 時半にヴィクトリア港に着いて、米国移民艦に乗船し、翌 14 日午前 7 時にシアトルに到着した。シアトルでは「櫻内の叔父と叔母」の二人が中瀬古を出迎えた。「櫻内の叔父」とは横濱正金銀行シアトル支店支配人であった櫻内篤彌のことである[9]。叔母の櫻内タカは、母、絹子の姉妹にあたる。日記には到着したばかりのシアトルでの生活が記されており、それによれば篤彌は彼の勤め先である正金銀行に連れて行ったり、自宅では英語を教えたりした。

タカは、“Bush & Lane”という楽器店でピアノのレッスンを受けていたようである。中瀬古はしばしばタカのレッスンが終わるのを待って一緒に町に出かけた。中瀬古自身も、自宅でピアノの練習もしていたようである。

1926（大正 15）年、中瀬古はワシントン大学音楽学部に入学し、ピアノを専攻した。遺品に収められていた、留学時に中瀬古が使ったノート 15 冊からは、音楽の他に教育学、東洋学、哲学、社会学などの科目を受講していたことが確認できる。ノートの表紙に ‘University of Washington Blue Book’ と印刷されており、氏名、名前、科目名、日付が自筆で記されている。例えば「Music 106」と記されたノートには、リヒャルト・シュトラウスの代表作品について要約されており、そこに第三者による評価が書き込まれている。ワシントン大学卒業後、中瀬古は、ニューヨーク州ロチェスターにあるイーストマン音楽学校大学院に進学した。ここでは音楽学を専攻し、この時初めて必修科目である作曲を学んだ[10]。中瀬古が最初の日本人留学生で、1932（昭和 7）年に日本人で初めて音楽の修士号を取得したこと以外、多くのことは分かっていない。

1-3　ベルリンにて（1932-33）

1932（昭和 7）年、イーストマン音楽学校大学院修了後、ヨーロッパを周遊して帰国する予定だったが、その途中、フランスで開かれていた現代音楽祭でパウル・ヒンデミットの《金管と弦のための協奏的音楽》を聴き、今まで聴いたことのない響きに驚くと同時に、自分と気が合いそうだと興味をもったことから、友人のつてを辿り、ベルリンに向かった[11]。その後、入学試験を受け、ベルリン国立音楽大学に在籍した。ただし、ベルリンに滞在し、ヒンデミットのもとで作曲を学んだのは「夏休みを挟んだ数ヵ月」の短期間であった[12]。ヒンデミットの指導については 1973 年に発行された『FM 音楽』の記事「巨匠との対話（15）P. ヒンデミット」において中瀬古自身が語っている[13]。その概要を記すと次のようになる。①ヒンデミットが収集した民謡に基づいて作曲。三和音がでてこない線的な音楽を作らせた。②当時はほとんど注目されていなかった「グレゴリオ聖歌」の研究。③オーケストラの合奏。一つの楽器がある程度、弾けるようになると、他の楽器を勉強させた。④不要な音を消していく指導。ヒンデミットは、音を多く使いすぎることを指摘し、どの音が余分であるかを的確に教えた。

以上が概要である。なお同時期にヒンデミットに作曲を師事した下総皖一によると、毎週一回ずつヒンデミットを中心とした研究会「我々の和声学」が開かれていたようであるが[14]、中瀬古も参加したかどうかは不明である。また、1936（昭和 11）年にヒンデミットのもとで作曲を学んだ坂本良隆によれば、「（ヒンデミット教授の）授業は 1 週 3 回、8 時間ずつ 2 日の作曲理論」と「4 時間の室内楽合奏」があった[15]。室内楽合奏の授業があった点は上述の中瀬古の回想と一致する。

2. 同志社女子専門学校講師時代（1933-48）

2-1　戦中の作品

1933（昭和 8）年 4 月から中瀬古は「課外ピアノ」の教師として同志社女子専門学校に勤務した[16]。在籍期間中はちょうど日本が軍国主義へと傾倒していった時期で、キリスト教主義の同志社にとっても厳しい時代であった。このような世相が作曲活動にも影響が及んでいた。遺品の中から見つかった楽譜の中に戦時中に書かれた作品が 7 曲含まれており、そのうちの 1 曲が 1943（昭和 18）年 11 月に作曲された声楽とピアノのための作品《まなことぢて》である。自筆譜の表紙には赤鉛筆で「聖戦歌曲集」と記されており、戦争との関わりが認められる。根本四士男による歌詞「まなことぢて　祈りつつ思ふ　出て往きし親しき者はすこやかにませ」には、戦地に向う若者の無事を祈る気持ちが込められている。1942（昭和 17）年 12 月に作曲された管弦楽曲《行進曲「賛歌」》も時代背景を考慮すれば、上記の作品と同様に戦意高揚のために作られた可能性があるのではないかと推察される。

1944（昭和 19）年 9 月に作曲されたメゾソプラノとピアノのための《過越の祭りの前に》は聖書を題材とした声楽作品である。この作品では、ヨハネ福音書第 13 章第 1 節の「過越のまつりの前に、イエスこの世を去りて父に往くべき己が時の來れるのを知り、世に在る己の者を愛して、極まで之を愛し給へり」というイエスの最後の日を描いた場面から始まり、ルカ福音書第 24 章第 1 節～6 節のイエスが復活した場面で閉じられる。なお、聖書を歌詞として選ぶ理由を後年《詩篇 42 しかの渓川をしたひ喘ぐが如く》の作曲に際して次のように述べた。

「聖句を歌詞として選ぶようになつたのは、戦争が始まつて他のものでは心の支えにならなくなつた時からである。そして今もなお聖句は私にとつては切実で新鮮である」[17]

2-2　NHK・毎日新聞社主催「音楽コンクール」

1942（昭和 17）年 7 月 1 日に日比谷公会堂において第 11 回 NHK・毎日新聞社主催「音楽コンクール」作曲部門の本選会が開かれた。入賞者は 5 名で、中瀬古は第 3 位に入賞した[18]。この時の課題は「三首の万葉短歌による交声曲」というもので、応募者全員が次の三首の和歌に付曲した。

「今日よりは　顧みなくて　大君の　醜の御楯と　出で立つ我は」

「千萬の　軍なりとも　言挙せず　取りて来ぬべき　男とぞ思ふ」

「丈夫は　名をし立つべし　後の世に　聞継ぐ人も　語り継ぐがね」

「大君」や「軍」など軍国主義を想起させるような題材が選ばれたのは太平洋戦争が勃発した直後のコンクールであるからだろうか。1942（昭和 17）年に発行された『音楽の友』第 2 巻第 8 号には「東亜文化欄」編集局員の宇野正三によるコンクール作曲所感が掲載されており、中瀬古の作品を次のように評している。「他の曲に比較して優雅なものを感じた。恐らくおほらかな古典の味をねらつたものだらうが、激しい気魄に缺けるゐる。素朴な味をとる」[19]。この評が作品の特徴を言い得ているかどうかについては、作品が消失しているため判断できない。中瀬古作品に対して「優雅さ」や「おほらかさ」と言った表現が用いられているのは中瀬古が 5 人の入賞者の中で唯一の女性であったことと何らかの関わりがあるかもしれない。なお、鴛淵卲子が作成した年表には、1940 年にソプラノとピアノのための歌曲《万葉集巻二より「たけばぬれ」「ひとみなは」「たちばな」》という作品名が記されている。先述の課題とは異なる和歌ではあるものの、コンクールの直前に書かれていることは興味深い。コンクールを見据えて作曲した作品である可能性も考えられるからである。

2-3　演奏活動

1930 年代から 50 年代にかけて中瀬古は学内の礼拝における奏楽者、学外での演奏会で主に伴奏者として演奏活動を行っていた。まず学内での活動について、1935（昭和 10）年 10 月に発行された「同志社高等女學部新聞」第 2 号には、同志社創立 60 周年記念週間の一環として行われた大音楽会で演奏されたヘンデルの《メサイア》のピアノ伴奏者として名が載っている。「森本先生指揮、中瀬古先生伴奏、竹内禎子、太田黒養二、内田栄一の四氏を迎へヘンデル曲オラトリオ「救世主」が演奏され、記念礼拝と共に全国に放送される事になっている」[20]。1936（昭和 11）年 12 月には、同

志社女子専門学校と同志社高等女学部との合同で行われたクリスマス賛美礼拝にて奏楽を行った[21]。当時、生徒として同志社女学校に通っていた有賀のゆりによれば中瀬古は「第二次世界大戦中、それから戦後には、暖房のない寒い栄光館でモンペに靴ばきという恰好で」礼拝のオルガンを弾いていたという[22]。

次に学外の演奏活動について、最も早い時期のものとして確認できるのは、1937（昭和 12）年 7 月 24 日、大阪市平野町瓦斯ビル公演場において行われたピアノ同好会主催の「珍しい楽器　ハープシコード　ヴィオラダモーレ演奏會」である。この時、中瀬古は「ハープシコード伴奏者」として出演し、メゾソプラノ歌手の加藤貞と共にカッチーニ《麗しのアマリッリ》、アレッサンドロ・スカルラッティ《幻想よ来れ》、ロッティ《愛らしの唇》を演奏した[23]。この時期は、日本におけるチェンバロ演奏の黎明期にあたることから、中瀬古は、記録が確認されている中で最も早くに日本のコンサートでチェンバロを弾いた日本人と考えられている[24]。『京都混声合唱団六十年史』には、京都合唱報告団（後の京都混声合唱団）の演奏会においてパイプオルガン奏者としての出演がたびたび記録されている。1943（昭和 18）年 7 月 3 日、第一回演奏会では、同志社栄光館で朝比奈隆指揮のもとベートーヴェン《荘厳ミサ曲》作品 123 を加藤千恵（ソプラノ）、加藤貞（アルト）、木村四郎（テノール）、藤堂顕一郎（バス）と共にパイプオルガン伴奏で参加した[25]。1950 年（昭和 25）年 11 月 17 日の「バッハ二百年記念のための「讃美歌の夕」では、森本芳雄指揮でバッハ《マタイ受難曲》序章と終章を演奏した[26]。同年 12 月 10 日の「ヨハン・セバスティアン・バッハ二百年記念」の際には山田和男指揮のもとバッハ《マタイ伝福音書による受難曲》を同志社栄光館で演奏した[27]。1951（昭和 26）年 8 月 20 日「NHK 京都放送局中継放送」では同志社栄光館で森本芳雄指揮のもとフォーレ《レクイエム》を演奏し、この演奏会は全国生中継された[28]。同年 11 月 26 日「進駐軍向けクリスマス放送の録音」が岡崎京都キャバナで行われ、前窪一雄指揮のもとヘンデルのオラトリオ《メサイア》が抜粋して演奏された。同年 12 月 16 日「故森本芳雄先生追悼演奏会」（同志社栄光館）、山口昇指揮、フォーレ《レクイエム》の「Introitus et Kyrie（序章と主よ憐みたまえ）」と「In paradisum（天国にて）」が演奏された[29]。この演奏会を最後に同合唱団との共演の記録は見当たらない。1951（昭和 26）年にソプラノ歌手、鳥井晴子の伴奏者としてヒンデミットの連作歌曲《マリアの生涯》本邦初演を行った[30]。中瀬古は 1950 年から 53 年にかけて作曲活動と並行して、ヒンデミットの音楽

理論についての論考や記事を集中的に執筆していたことから、この演奏会も、日本にヒンデミットの音楽を紹介する目的があったと捉えることができるだろう。

3. 同志社女子大学教授時代（1949-73）

1949（昭和 24）年、新学制のもと同志社女子専門学校が廃され、同志社女子大学が開設された。この年、中瀬古は音楽専攻の教授として着任し、第一年度前期に開講された科目では和声とピアノを担当した[31]。

3-1　イェール大学へ

1954（昭和 29）年 8 月 22 日、中瀬古はフルブライト奨学金を獲得し、イェール大学音楽学校に留学するために氷川丸で横浜を出航した[32]。当時隔年で作曲講座を開いていたヒンデミットのもとで再び作曲を学ぶためであった[33]。しかしながらこの目的は果たされなかった。本来ならば 1954 年はイェール大学にいるはずだったが前年度を最後にヒンデミットがアメリカを去ったためである。その代わり、彼の弟子で後任となったディヴィッド・クレエンビュール David Kraehenbuehl（1923-77）のもとで 2 年間作曲を学んだ。「二年間のイェール大學音樂學校での學生生活の一番大きな収穫は、多機能性（Polyfunctionality）の手法を、その提唱者ディヴィッド・クレエンビュールから直接に學び得たことである」[34] と後年述べているほどその影響力は大きなものであった。なお多機能性とは、多調性（Polytonality）に由来し、「一つの和音の中にも、同時に 2 つ以上の調性が理論的に存在しているもの」[35] を意味する。1956 年に作曲された《Two Movements for Violin and Piano ヴァイオリンとピアノのための 2 楽章》の表紙の右下にはイェール大学のある都市「New Haven」と自筆で書かれていることから、イェール大学留学中に作曲されたと考えられ、多機能性理論が使用された初期の作品である可能性がある。なおこの作品は、帰国後 1957（昭和 32）年 2 月 17 日に京都市の日仏会館で山田宗二郎のヴァイオリンと中瀬古のピアノによって演奏された[36]。

3-2　戦後の作品

1950 年代以降、ほぼ毎年自作品が発表されるようになり、中瀬古は作曲家として本格的に活動を始めたと考えられる。【表 1】は中瀬古作品をジャンル別に分類した

一覧である。鴛淵卲子作成の「作品年表」および《頌啓会》によって整理された自筆譜の作品リストをもとに筆者が再構成した。宗教的声楽曲（合唱曲）13 作品、宗教的声楽曲（独唱曲）5 作品、世俗的声楽曲（合唱曲）1 作品、世俗的声楽曲（独唱曲）6 作品、管弦楽曲 4 作品、室内楽曲 11 作品、ピアノ曲 2 作品、その他（校歌や編曲作品）5 作品、消失曲 14 作品、未完や断片・スケッチ 4 作品が確認されている。この表から明らかになるのは、現存する作品 47 作品のうち 18 作品が聖書を題材とした宗教的声楽作品であることである。18 作品中、戦中に書かれたものは 1 曲のみで、その他はすべて戦後であり、その創作は晩年の 1971 年まで確認できる。このことから中瀬古にとって聖書を題材とした創作が戦後の作曲活動の大きなウエイトを占めていたことが分かる。

その次に多いのは室内楽曲で 11 作品中、ヴァイオリンとピアノ（またはパイプオルガン）のための小品あるいはヴァイオリン独奏曲が 7 作品ある。上演記録や自筆譜の書き込みなどから判断できるのは、初演をしたヴァイオリニストは同志社女子大学の同僚であった鴛淵卲子であったことである。鴛淵卲子は 1974 年 6 月 1 日に同志社栄光館で行われた「中瀬古和追悼記念演奏会」においても《Movements for Solo Violin》の独奏を演奏していることから、中瀬古が最も信頼を置いた演奏者の一人とみなすことができよう。

3-3　作品の初演

【表 1】に挙げた全作品のうち公の場で演奏されていたことが確認できるものが 20 作品ある。個々の作品について述べることは機会を改めることとし、ここではそれらがどのような場で発表されたのかに着目して情報を整理する。当時、京都において新曲を発表する場には、たとえば京都音楽家クラブ主宰の「邦人作品演奏会」や「オーディション」があった。オーディションとは、「小さな会場で研究的しかも程度の高い演奏を鑑賞する」という意味で使われ、関西日仏学館の協力のもと、1958（昭和 33）年 1 月まで毎月定期的に開かれていた[37]。中瀬古は 1957（昭和 32）年 3 月に同クラブに入会しており、邦人作品発表会では《ヴァイオリンとピアノのための 2 楽章》と《聖画》を、オーディションではソプラノとチェロのための《イザヤの 3 つの預言》を発表した。なお、オーディションについて中瀬古は、彼女自身が留学時代（おそらく 2 度目の留学先であるイェール大学を指しているのだろう）に所属してい

た「学生作曲家連盟」の会と比較して、「（京都）音楽家クラブのオーディションでは作品と聴き手の距離が遠すぎる、あの位の遠さに離して見るのは演奏の場合は適当と思うが、作曲の場合はそのもう一段階手前の、作品を作者と聴き手が共有して検討出来るような集りが先づほしいと思う」と所感を述べている[38]。

1951（昭和26）年1月、音楽評論家の中原昭哉と中瀬古とが主宰者となって「グレゴリアン・チャント研究会」が発足された。ここでは毎月1回講師として上村京子を招きレッスンやラテン語の音節分析と音楽の関係の研究の他、演奏会も行われ、その際に新作を発表していた。1961（昭和36）年9月10日にアメリカ文化センターで行われた同研究会発表会のプログラムによれば、会員一同（男性5名、女声25名）によってグレゴリアン・チャントが歌われた後、メゾソプラノと女声合唱のための《主よいずこに往きたもうか》が初演された[39]。

1961（昭和36）年10月には京都在住の作曲家のサークルとして「創る会」が発足された。ここでは3ヵ月ごとに例会が開かれ、会員の作品（主にテープに録音されて提出された）について発表したり、現代音楽全般について意見を交換していた[40]。1962（昭和37）年には19名の会員が集まり、発表会において中瀬古の作品、ソプラノ、メゾソプラノ、ヴァイオリンのための《知恵書》、ソプラノ独唱《ヴェルハーラン詩集より「花の方へ」「砂浜」》、《ピアノのためのオスティナート》、《弦楽六重奏》（第1楽章のみ）、バリトン独唱と混声合唱とパイプオルガンのための《われ黎明を呼びさまさん》が初演された[41]。その他、同志社女子大学の音楽学科内で毎年行われていた研究発表においても新曲が発表されていた。

中瀬古の宗教的声楽作品を発表する場として重要な役割を果たしたのは、1966（昭和41）年4月に発足された関西キリスト教グループ（後の関西キリスト教研究会）である。このグループは、キリスト教音楽の研究、演奏を通して、現代の日本のキリスト教音楽に貢献する事を目的として創設され、定期的に教会音楽の講演や演奏を行い、関西における教会音楽の普及に貢献した[42]。同グループの最終到達点は日本語と音楽に密接なつながりを持たせた、新しい讃美歌の創作を行うことであり、その成果として中瀬古は3曲の讃美歌《すべての国よ神よたたえよ》（詩篇117）、《主シオンのとらわれ人をかえしたまいしとき》（詩篇126）、《神よ捧げまつる感謝の歌を》（詩篇65）を作曲したのである。これらの作品は1971（昭和46）年9月に京都修学院のセミナーハウスで初演された。

以上のように、中瀬古作品の多くは京都を中心とした近畿圏内で発表されたが、一度だけ東京で演奏されたことが確認された。1972（昭和47）年3月23日、合唱曲《われ黎明をよびさまさん》と《そは荒野に水わきいで》が日本合唱協会の特別演奏会「パイプオルガンと合唱の夕」において東京カテドラル教会で演奏されたのである。前者については1969（昭和44）年11月14日に同志社栄光館において「音楽学科第1回定期演奏会」の際に初演が行われていたし、後者についても1970（昭和45）年11月14日に「音楽学科第2回合唱発表会」で初演が行われていた。東京で再演することになった経緯について、両曲を指揮した今城淳行によれば、学内のみの演奏で終わらせるのは惜しく、東京でも演奏されるべき曲だということで、東京でオルガンを探したところ、当時同志社栄光館のパイプオルガンに匹敵する楽器は東京カテドラル教会にしかなかったという[43]。

1973（昭和48）年5月18日午前零時27分、中瀬古は姉の英に看取られ、静かに安らかに眠るように召天した。告別式は5月19日午後2時から自宅で行われ、翌月6月3日には同志社女子大学栄光館ファウラーチャペルにて「故　中瀬古和教授音楽学科葬」が執行された。この時、音楽学科学生により讃美歌《すべての国よ神をたたえよ》（詩篇117）と《主、シオンのとらわれ人をかえしたまいしとき》（詩篇126）が歌われた[44]。

おわりに

本論では、中瀬古和の生涯を修業時代、帰国後の演奏活動と作曲活動と作品の初演に焦点をあてて論じた。ここで明らかになったことは、まず修業時代について、同志社女学校時代から西洋音楽に対する関心が高く、卒業と同時に単身で渡米した折、中瀬古の叔父、叔母からの生活面でのサポートを受けながら、本格的に音楽を学んだこと、ベルリンでヒンデミットに師事した期間は1年に満たないものであったものの、そこで学んだことは作曲家として人生を歩む上で重要な出来事であったということである。帰国後はヒンデミットの音楽理論や音楽作品を日本に伝える役割を果たし、いうまでもなく創作活動にもその影響が反映されているはずである。中瀬古作品におけるヒンデミット及びイェール大学で作曲を師事したクレエンビュールの影響については今後の研究を待たなければならない。次に演奏活動について、1930年代から50年代にかけてチェンバロ、パイプオルガン、ピアノの演奏者としての活動が確認でき

た。しかしながら 1950 年代以降、演奏活動はほとんど見られなくなり、それに代わって自作品を定期的に発表するようになった。作品が初演された場は、京都を拠点にして開かれた様々な演奏会や研究会の発表会であった。最後に創作活動については、現存する 47 作品をジャンルごとに分類したところ聖書を題材とした声楽作品が作曲活動の大きなウエイトを占めていたことが明らかになった。中瀬古がキリスト者であったことの他、自身の戦争体験も少なからず影響を与えていた。キリスト者として宗教的声楽作品を創作することこそが彼女の作曲家としてのアイデンティティであったと考えられる。

謝辞

本論を作成するにあたって《頌啓会》、故今城淳行氏、鴛淵紹子氏、森一郎氏の他、多くの方から情報をご提供いただいた。ここに深く感謝申し上げる。

【表 1】ジャンル別作品一覧

凡例

・宗教的声楽曲とは、聖書にもとづいた歌詞をもつ声楽作品も含む。

・世俗的声楽曲とは、聖書以外のものを歌詞にした声楽作品を示す。

・記載のない限りここに掲げた自筆譜の所蔵場所は同志社女子大学図書館である。

1. 宗教的声楽曲

1）合唱曲

曲目	成立年月
《イザヤ》（混声合唱とピアノ）	1948 年 8 月
《Resurrection 復活》（メゾソプラノ、バリトン、混声合唱とパイプオルガン）	1953 年 6 月
《主よ、いずこに往きたもうか》（ソプラノ、女声合唱とヴァイオリン）	1960 年 9 月
《聖画：三浦アンナ著「白馬に乗れるロゴス」に寄せて》（混声五重唱、無伴奏）	1958 年 8 月
《寒梅－竹中文子－》（男声合唱とパイプオルガン）	1959 年 9 月
《知恵書》（女声合唱、ヴァイオリン、ピアノ）	1961 年 11 月
《エホバよ我ふかき渕より汝を呼べり（詩篇 130）》（女声 4 部合唱とヴィオリン 3 声部）	1965 年 8 月

《頌（ルカ 2 章 28-32 節)》（バリトンと女声合唱、無伴奏）	1967 年 9 月
《われ黎明を呼びさまさん》（バリトン、混声合唱、パイプオルガン）	1967 年 10 月
《そは荒野に水わきいで》（テノール、混声合唱、パイプオルガン）	1970 年 10 月
《詩篇歌－詩篇 65、117、126 による》（女声合唱とパイプオルガン）	1971 年 4 月
《わが羊を救え》（混声合唱とオルガン？）	不明
《主よ何処へ往き給ふや》（混声合唱、無伴奏）	不明

2）独唱曲

曲目	成立年月
《過越の祭りの前に》（メゾソプラノとピアノ）	1944 年 9 月
《Verses from Isaiah（イザヤの三つの預言)》（ソプラノとチェロ）	1956 年 9 月
《しかの渓川をしたひ喘ぐが如く（詩篇 42)》（ソプラノとピアノ）	1957 年 9 月
《視よ冬すでに過ぎ（雅歌)》（ソプラノとピアノ）	1963 年 9 月
《北風よ起れ（雅歌)》（ソプラノとピアノ）	1963 年 11 月

2. 世俗的声楽曲

1）合唱曲（重唱を含む）

曲目	成立年
《航海日記》（男声合唱、無伴奏）	不明

2）独唱曲

曲目	成立年
《まなことぢて》	1943 年 11 月
《大木惇夫詩集「日本の花」に寄する前奏曲》	1944 年 1-11 月
《ギリシア抒情詩》	1944 年
《魅せられたる魂》	1952 年 12 月
《メゾソプラノと 3 つのヴァイオリンのための歌曲》	1964 年 11 月
《大沢忍氏歌集「遠翔」より》	1968 年 10 月

3. 管弦楽曲

曲目	成立年
《前奏曲とパッサカリア》	1942 年 8 月
《行進曲「讃歌」》	1942 年 12 月
《ヴィオラ前奏曲》	1946 年 9 月
《Prelude Ⅰ, Ⅱ and Marche Fúnebre from the Ballet “Shadow and Light” based on the Ancient Chronicles of Japan 幽明》	1954 年 4 月

4. 室内楽曲

曲目	成立年
《クラリネット小曲》（クラリネットとピアノ）	1941 年 12 月
《Fantasia》（ヴァイオリンとピアノ？）	1949 年 4 月
《Soliloquy》（ヴァイオリンとピアノ？）	1949 年 5 月
《Sonatine Ⅰ（Ode）pour Violine et Piano》（ヴァイオリンとピアノ）	1951 年 7 月
《Sonata Ⅰ for Violin and Piano》（ヴァイオリンとピアノ）	1952 年 6 月
《String Quartet Ⅰ》	1953 年 9 月
《Two Movements for Violin and Piano》（ヴァイオリンとピアノ）	1956 年 7 月
《…and after the fire a small Voice》（ヴァイオリンとパイプオルガン）	1958 年 11 月
《String Quartet Ⅱ》	1959 年 3 月／1962 年 10 月
《Sextet I for Strings》	1966 年 10 月
《Movements for Solo Violin》（無伴奏）	1971 年 10 月

5. ピアノ曲

曲目	成立年
《前奏曲》	1944 年頃（？）
《Suite Ⅱ》	1947 年 6 月

6. その他

曲目	成立年
山城高等学校校歌	不明
滋賀女子高等学校校歌	不明
《マタイ受難曲》編曲（女性 4 部合唱）	不明
《主よみもとに近づかん》編曲（オルガンの前奏曲付き）	不明
《集え若人》編曲	不明

7. 消失曲

曲目	成立年
《万葉集巻二より　たけばぬれ、ひとみなは、たちばなの》（ソプラノとピアノ）	1940 年
《高安やす子詩：浜木綿、萌ゆる芽他》（ソプラノとピアノ）	1942 年
《復活歌》（ソプラノとピアノ）	1942 年
《すずかげの》（ソプラノとピアノ）	1944 年
《すずかはのほとり》（ソプラノとピアノ）	1944 年
《新約抄（マタイ伝 18 章）》（ソプラノとピアノ）	1945 年
《Die Sonette an Orpheus-R. M. Rilke》（バスあるいはアルト）	1947 年
《南なつ：なにの香ぞ》（ソプラノとピアノ）	1949 年
《Impromptu　みなみのかぜにむかへば》（ソプラノとピアノ）	1950 年
《新約抄（マタイ伝 19 章 18 節）》	1951 年
《Impromptu　いつしかもえでし》（ソプラノとピアノ）	1952 年
《砂浜・花の方へ－ヴェールハーラン詩、高村高太郎訳》（メゾソプラノとピアノ）	1962 年
《古代女流詩　人狭井川、うつせみし神に堪えねば》（ソプラノとヴァイオリン 2 声部？）	（1964 年頃）
《ピアノのための Ostinato》（ピアノ独奏）	1965 年

8. 未完、断片、スケッチ

曲目	成立年
《イザヤ》（ソプラノとパイプオルガン）未完	不明
《いのち》（声楽曲）	不明
《太鼓たたき》（フルートと？）	不明
《おんたまを故山に迎ふ》（フルートと？）	不明

注

1　鴛淵卲子作成「中瀬古和　略歴と作品年表」、稲垣静一「中瀬古先生の作品」、有賀のゆり「中瀬古先生と作曲」（いずれも「中瀬古和　追悼演奏会」プログラム所収、1974 年。）

2　《頌啓会》は中瀬古和先生の追悼演奏会を行うにあたって、音楽学科の卒業生、在学生、教員と共同して活動するための会として 1974 年 3 月に発足した。同組織は 2019 年 3 月をもって解体した。

3 「中瀬古和没後 40 年メモリアルコンサート」2013 年 9 月 1 日（いずみホール）、「中瀬古和生誕 110 年記念メモリアルコンサート」2019 年 3 月 3 日（同志社栄光館ファウラーチャペル）、「音楽学会《頌啓会》だより」第 43 号、2012 年、9-12 頁、「音楽学会《頌啓会》だより」第 44 号、2013 年、9-20 頁。

4 日本戦後音楽史研究会編『日本戦後音楽史　上』、平凡社、2004 年、321 頁。

5 『同志社百年史　通史編二』同志社、1979 年、146 頁。

6 『しばぐさ』5 月号、1966 年、15 頁。

7 『同志社教会歴史名簿索引』、日本キリスト教団同志社教会、2008 年、134 頁。決心の動機は、1921 年 5 月 27 日に木村清松牧師を招いての伝道集会での説教であった。中山幾美子氏を通じて同志社教会の望月修治牧師にご教示頂いた。深く感謝申し上げる。

8 同志社山脈編集委員会編『同志社山脈』、晃洋書房、2004 年、144-145 頁。

9 『人事興信録』データベース
https : //jahis.law.nagoya-u.ac.jp/who/docs/who8-10278/image（2021 年 10 月 13 日 最終閲覧）

10 有賀のゆり「中瀬古先生と作曲」、『音楽学科の変遷ーその誕生から半世紀』所収、2006 年、64 頁。

11 中瀬古和「巨匠との対話（15）P. ヒンデミット」『週間 FM』第 3 巻第 15 号、1973 年、70 頁。

12 「京都音楽家クラブ」第 9 号、1956 年、2 頁。

13 中瀬古和「巨匠との対話（15）P. ヒンデミット」、『週刊 FM』第 3 巻第 15 号、1973 年、69-73 頁。

14 パウル・ヒンデミット『作曲の手引き』、音楽之友社、1953 年、223 頁。

15 パウル・ヒンデミット『和声学』1952 年、音楽之友社、149 頁。

16 クラップ女史の帰国後中瀬古は音楽通論の講義を引き継いだ。『しばぐさ』5 号、1966 年、15 頁。

17 『世界音楽全集　日本歌曲集 III』音楽之友社、1958 年、199 頁。

18 『音楽の友』第 2 巻第 8 号、1942 年、114 頁。コンクール第 1 位は福井文彦、第 2 位は保田正であった。

19 前掲書、110 頁。

20 「同志社高等女学部新聞」第 2 巻、1935 年 10 月発行、2 頁。

21 「同志社高等女学部新聞」第 7 巻、1936 年 11 月 12 月発行、2 頁。

22 『しばぐさ』13 号、1974 年、22 頁。

23 「珍しい楽器ハープシコード　ヴィオラダモーレ演奏會」配布プログラム、1937 年 7 月 24 日。

24 日本におけるチェンバロ演奏の始まりについては梅岡俊彦氏からご教示いただいた。

25 金子清明編著『京都混声合唱団六十年史』、洛西書院、1985 年、40-41 頁。

26 前掲書、60 頁。

27 前掲書、67 頁。

28 前掲書、67-68 頁。

29 前掲書、71 頁。

30 鴛淵卲子作成「中瀬古和　略歴と作品年表」、「中瀬古和追悼演奏会」配布プログラム所収、1974 年、頁付けなし。

31 『同志社百年史　通史編二』同志社、1979 年、1445 頁。

32 前掲書、1336 頁。

33 「京都音楽家クラブ会報」第 9 巻、1956 年、2 頁。

34 中瀬古和「多機能性（Polyfunctionality）」、『同志社女子大學學術研究年報　7』1956 年、195 頁。

35 同上。

36 「京都音楽家クラブ会報」第 13 号、1957 年、3 頁。

37 同上。

38 「京都音楽家クラブ会報」第 14 号、1957 年、2 頁。

39 「グレゴリアン・チャントの会」発表会プログラム、1961 年 9 月 10 日。及び『音楽芸術　12 月臨時増刊　日本の作曲　1961→67』、1967 年、31 頁。

40 「京都音楽家クラブ会報」第 83 号、1962 年、2 頁。

41 『音楽芸術　12 月臨時増刊　日本の作曲 1961→67』、1967 年、31 頁。

42 関西キリスト教音楽研究グループ『新しい教会音楽への試み』、大阪パレストリーナ・インスティテュート、1972 年、1 頁。

43 筆者による故今城淳行氏へのインタビュー（長岡京市）2017 年 8 月 3 日。

44 「故　中瀬古和教授音楽学科葬次第」、1974 年 6 月 3 日。

引用文献

同志社女子大学音楽学会《頌啓会》「音楽学会《頌啓会》だより」第 43 号、音楽学会《頌啓会》、2012 年。

同志社女子大学音楽学会《頌啓会》「音楽学会《頌啓会》だより」第 44 号、音楽学会《頌啓会》、2013 年。

同志社社史史料編集所編『同志社百年史　通史編二』、同志社、1979 年。

同志社山脈編集委員会編『同志社山脈－113 人のプロフィール－』晃洋書房、2004 年。

『同志社教会歴史名簿索引』、日本キリスト教団同志社教会、2008 年。

同志社女子大学編『しばぐさ』5 月号、同志社女子大学、1966 年。

同志社女子大学学芸学部音楽学科史編纂委員会編『音楽学科の変遷－その誕生から半世紀』、同志社女子大学学芸学部音楽学科、2006 年。

「同志社高等女学部新聞」第 2 巻、昭和 10 年 10 月発行、1935 年。

「同志社高等女学部新聞」第 7 巻、昭和 11 年 12 月発行、1936 年。

日本戦後音楽史研究会編『日本戦後音楽史　上』、平凡社、2007 年。

『人事興信録』データベース

https : //jahis.law.nagoya-u.ac.jp/who/docs/who8-10278/image（2021 年 10 月 13 日 最終閲覧）

「京都音楽家クラブ会報」第 9 号（復刻版）京都音楽家クラブ、1956 年。

「京都音楽家クラブ会報」第 13 号（復刻版）京都音楽家クラブ、1957 年。

「京都音楽家クラブ会報」第 68 号（復刻版）京都音楽家クラブ、1961 年。

「京都音楽家クラブ会報」第 83 号（復刻版）京都音楽家クラブ、1962 年。

『週刊　FM』第 3 巻第 15 号、音楽之友社、1973 年。

『音楽芸術　12 月臨時増刊　日本の作曲 1961→67』音楽之友社、1967 年。

『世界音楽大全集　声楽篇第 36 巻　日本歌曲集 III』音楽之友社、1958 年。

関西キリスト教音楽研究グループ『新しい教会音楽への試み』、大阪パレストリーナ・インスティテュート、1972 年。

金子清明編著『京都混声合唱団六十年史』洛西書院、1985 年。

中瀬古和「多機能性（Polyfunctionality）」、『同志社女子大學學術研究年報　7』、1956年、195-202頁。
「中瀬古和　追悼演奏会」配布プログラム、1974年6月1日。
「故　中瀬古和教授音楽学科葬次第」、1974年6月3日。
パウル・ヒンデミット『和声学』坂本良隆訳、音楽之友社、1952年。
パウル・ヒンデミット『作曲の手引き』下総皖一訳、音楽之友社、1953年。
『音楽の友』第2巻第8号、音楽之友社、1942年。
「グレゴリアン・チャントの会」配布プログラム、1961年9月10日。
「珍しい楽器ハープシコード　ヴィオラダモーレ演奏會」配布プログラム、1937年7月24日。